比類なき大変ニ相成候

本書は、岐阜県歴史資料館所蔵の小島眞可家文書のうちの美濃国方県郡小西郷村（現岐阜市小西郷）の庄屋であった小島当三郎光純が記した「公用日記」が題材となっている。

小島家が庄屋を務めた方県郡小西郷村は磐城平藩安藤氏の飛び地所領で、美濃国方県・厚見・本巣・羽栗郡に点在し、あわせて一万八千石にも及んでいた。幕末の藩主であった安藤信正は幕府老中となり、公武合体策を進めた人物である。しかし和宮降嫁直後の文久２年（１８６２）１月に江戸城坂下門外で水戸浪士の襲撃にあい失脚した。こうした物々しい情勢のなか、磐城平藩の有力な庄屋であった小島当三郎は、他の庄屋たちと共に、王政復古・戊辰戦争と進む時代の大転換期に領地・領民のために様々な活動したことが克明に記されている。

江戸時代の武士と農民の関係というと、支配者と被支配者という一方的な関係であったと思われているが、この本はそのような概念だけでは捉えられない事実があったことを示している。

本書は、この日記に記された史実を一般の方々に知って貰えるようにと敢えて物語として著わされている。